kお買い上げありがとうございます。
こちら都合により音声作品の企画として続行することに不安を感じますので、未完成の企画中止となりますが、そのまま公開しないのは残念ですので、こちらに公開します。
個人的に2章と6章は文句ないのですが、その他はすっとばして最後に見ることをおすすめします。

//2章

//研究者・正面少し遠く

研究者「おっ……来たねぇ。キミが今回の被験者かな……」

//ノエル・正面近く

ノエル「あなたは……」

研究者「ここの研究者だよ。キミの身体を隅々まで検査するのが仕事だね」

//管理者・右側近く

管理者「では、そこのベッドに横になって。すぐに始めるわ」

＝ＳＥ・ベッドへ横になり、拘束具をつけられる

＝ノエル・正面近く

ノエル「なっ……拘束具は必要ないでしょ！」

＝研究者・右側近く

研究者「キミは亡命を求めてるんだよね？　この程度で文句を言っていいのかな？」

ノエル「……わかったわ。好きにしてちょうだい」

＝管理者・左側近く

管理者「では、これからなにをするか教えておくわね」

研究者「そこまで丁寧にする必要あるかな？　さっさとレオタード結界を発動させちゃおうよ。ほら」

ノエル「んっ……！」

ノエル（来たわね……これが触手レオタード……思ってたより、普通……）

＝研究者・右耳元

研究者「ちゃんと我慢した方がいいよ？　勃起しちゃったら、レオタードに責められちゃうからね？（囁き）　ふぅ～（息吹きかけ）」

ノエル「んっ……そんな簡単に勃起するわけないでしょ！」

研究者「そうかなぁ？（囁き）ふぅ～、ふぅ～（息吹きかけ）んちゅっ」

ノエル「ぁ……んっ……」

研究者「ほら、ビクってしてないで脚を開いてごらん」

ノエル「脚を開く必要まではないはず……」

研究者「じゃあ、強引に開くまでだね」

ノエル「あっ……っ、んっ……！？　れ、レオタードが、こすれて……っ！」

ノエル「んあぁあぁっ！？　な、中に、入ってくる……」

ノエル（話には聞いてたけど、これは……！）

研究者「なにがどこに入ってくるのかな？　教えてくれない？　ほら、ほら（囁き）（囁き）」

ノエル「言う必要はない……っ」

〃管理者・左耳元

管理者「わたしも答えてもらいたいわね。ふう～（囁き）」

ノエル「にゅ、ニュルニュルしたものが、おちんぽの中に……っ！」

研究者「いいねぇ、清楚っぽい顔なのに、おちんぽなんて言っちゃって♪」

管理者「ちなみにその触手、尿道に入るだけじゃないから。もっと特殊な機能もあるのよ」

研究者「触手での快楽責め、毒の注入、毒素による連続射精……♪　キミを責め尽くすための機能が満載ってワケだね」

ノエル「な、なにを楽しそうに……」

研究者「そう強がっていられるのも、いまのうちだけだよ？　触手はもう、動き始めてるんだから」

ノエル「んっ、あっ……」

研究者「ほら、ニュルニュル動いて、キミのおちんぽを気持ちよくさせようとしてるでしょ？」

ノエル「あっ、くっ……んんん……っ！」

ノエル（尿道の奥まで、犯そうとしてる……っ）

管理者「わたしたちが手を触れなくても射精してしまいそうね」

研究者「初めての刺激だから仕方ないよ」

ノエル「あっ、いやっ、ダメ……おちんぽ、そんなにいじめないで……っ！」

ノエル「ダメっ、ダメっ……出ちゃう、出ちゃう……っ！」

ノエル「んっ、んんっ、んんんんっ、んんんんんっ！」

研究者「あーあ、射精しちゃった。言わんこっちゃない」

ノエル「はぁ、はぁ、はぁ……最初から、こうするつもりだったくせに……」

管理者「どうしてここで文句なのかしら。これは身体検査だって言ったのに」

研究者「だったら、追加の検査をすればいいだけだよ。触手くんは、もっとこの子のおちんぽをいじめたがってるしねぇ」

ノエル「ま、まだやるって言うの！」

//研究者・フェラの位置に移動しながら

研究者「そう言ってるんだよ。亡命希望者のノエルくん」

//管理者・左耳元耳舐め

管理者「では、わたしは、こちらを……あむっ、んちゅっ、れるっ、れるるるるっ、ちゅっ、れろろろろろ……」

//研究者・フェラの位置

研究者「耳への刺激だけで満足してはいけないよ？　重要なのは、このおちんぽなんだから」

ノエル「な、なに……っ！？　レオタードを着てるはずなのに……、おちんぽがおっぱいに……っ！」

研究者「極細の触手のおかげだね。両方同時に感じられて、得した気分かな？」

ノエル「違うっ……んあっ、あっ、ひあっ……！　おちんぽ、中も外も、ニュルニュルで……っ！」

研究者「いい声で鳴くねぇ……おっ、触手くんもご機嫌みたいだ。薔薇の毒を注ぎこみ始めたね」

ノエル「あぁぁあっ！？　おちんぽの中、あついぃ……！」

管理者「みんな、そう言うのよ……あむっ、れるっ……おちんぽ熱い、おちんぽ気持ちいい……んれるっ」

管理者「れろろろろろ……これを続けると、おかしくなっちゃよぉって言い出すの……はむっ、れるる……」

研究者「キミはそのまま気持ちよくなっていればいいよ……僕のおっぱいと、レオタードの触手責めでね」

研究者「射精まで行けば、キミは安全だと見なされるし……ほらほら、ニュルニュルで気持ちいいでしょ……？」

ノエル「で、でも……あっ、んっ、はあっ、んあっ……こんなところ、見られたくない……っ！　自分が、よがってるところなんて……！」

ノエル「んんんんっ！？　また、中で触手が暴れてる……あぁぁあっ、んんっ、はぁあ、んんっ！」

管理者「れろろっ、んれろっ……素直になってしまった方が楽よ……第一、なにもせずに亡命できるだなんて思っていないわよね……はむっ、れるっ」

ノエル「そ、それは……そう、だけどぉ……んぁぁあっ！」

管理者「そうやって我慢するからつらいのよ……はむっ、れるっ……」

研究者「もしかして、気持ちよくなれない理由があるのかな？」

ノエル「そ、そんなの、あるわけない……！」

ノエル（ダメよ……本当の狙いに気づかれるわけにはいかないわ……あのナノマシンだけは……）

研究者「なるほど……キミは、思っていたよりもマゾなんだね。もっと刺激が欲しいと」

研究者「まったく、欲しがり屋さんめ♪　もっと僕のおっぱいでしごいてあげるよ♪」

ノエル「誰が、もっとなんて……っ！」

ノエル「あぁっ、んあっ、それ、ダメ……っ！　激しすぎて……んあぁあぁっ！」

管理者「……れろろっ、私も少しサービスを……乳首を指先でぇ……」

ノエル「んあっ、熱い……な、なにこれ……っ！」

管理者「特別に薔薇の毒を塗ってあげてるのよ……とっても気持ちいいでしょ？」

ノエル「ひあぁっ！　ち、乳首までぇ……んっ、あっ、ふあぁっ！　これじゃ、亡命、できても……あなたたちに会うたびに、馬鹿にされる……」

研究者「馬鹿にはしないと思うよ。よがってる姿は思いだすだろうけどね」

ノエル「お、同じこと……あぁあっ！」

研究者「そんなに暴れないでくれ……それとも、もう限界かな……？」

ノエル「限界じゃ、ない……ひぃんっ！」

研究者「限界みたいだねぇ」

管理者「れろ、れろろ……イクなら、イっちゃう、ダメぇって叫んだ方が気持ちいいわよ？　さっきみたいに」

ノエル「い、言わない……そんなこと……あああああっ！？　おちんぽのなかぁ、またぁ、熱いの来てぇ……」

ノエル「ダメ、ダメっ、ダメダメっ……！　イクっ、これ、おちんぽ、イっちゃう……っ！」

ノエル「んんんんんっ……っ！」

//ＳＥ・射精

管理者「あむっ、んちゅっ、存分に出しなさいね……んちゅっ、ちゅっ」

ノエル「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……おちんぽ、イっちゃったぁ……」

研究者「嫌がっていた割には、いいイキっぷりだったねぇ」

ノエル「誰が、いいイキっぷりよ……っ！」

ノエル（でも、これで、レオタード結界のデータは送信できたわ……あとは、亡命者のフリをすればいいだけ……）

管理者「お疲れ様でした……と、言っておくわね。予想外のマゾさん♪」

研究者「もっと愉しみたいが……いまはやめておいてあげようか。触手も薔薇の毒も初めてだろうしね」

管理者「そうね……」

管理者（しかし、騙されなくてよかったわ……まさか、レオタード結界のデータを盗むために、亡命者のフリをするだなんて……）

管理者（気づいてよかったわ……そうじゃないと、偽のデータを送らせることなんて、できなかったもの……）

研究者「ふふっ♪　じゃあ、最後にこれを注入しておこうか」

ノエル「あぁぁぁぁぁぁっ！　な、なにを入れて……っ！」

研究者「回復剤だよ。それと、キミの精液を研究サンプルとして採取させてもらいたくて

ね」

管理者「そういういことなら、わたしも手伝おうかしら……んちゅっ、れるっ、れるるるぅ」

ノエル「これのどこか回復剤なのよ……さっきより、おちんぽの中が熱いのに……っ！」

研究者「良薬口に苦し。おちんぼに注入する薬なら、熱や快感があっても不思議じゃないよねぇ」

ノエル「そ、そう、だと、しても……あっ、んっ、ダメぇ……もう二回も出してるんだから……っ！」

研究者「もう少しの辛抱さ。終わったら、ゆっくり寝かせてあげるよ……ふふっ♪」

//3章

//奇襲者は仲間と話しています

奇襲者「データの解析が終わったって聞いたけど」

奇襲者「なるほど……こういうことだったのね。ナノマシンは？」

奇襲者「あと少しで完成ね……ふふっ。ノエルが体を張ってくれたおかげだわ。これで、ローズフレグランスを壊滅できる」

奇襲者「あとは、無事に侵入するだけ……ま、これはあんまり心配してないけど」

奇襲者「……ん？　ノエルの救出？　忘れるわけないでしょ？　いの一番にあの子を助けるつもりよ」

奇襲者「それだって心配いらないわ。ローズフレグランスを壊滅させるために、いくつも手を打ってきたんだから」

奇襲者「ノエルの潜入調査は、その仕上げ。揃うものは揃ったし、あとは実行に移すだけ」

奇襲者「ふふふふっ。無様に逃惑うローズフレグランスのヤツらが目に浮かぶわ」

奇襲者「あっ……祝杯の準備ぐらいしておきなさいよ？　これから、大仕事を成し遂げてくるんだから」

奇襲者「ノエルの好物も用意しておくのよ？　あの子がいなければ、この作戦は成立しなかったんだからね？」

奇襲者「じゃあ、あっちで待ってるわ。ナノマシンが完成したら、また呼んで」

奇襲者「ふふっ、ふふふふふっ。やっと、アイツらを滅ぼせる日が来るのね」

奇襲者「この日が来るのを、どれだけ待ち望んだことか……ふふっ、ふふふふふっ」

//4章

//奇襲者・正面近く

奇襲者「ふぅ……ひとまず、侵入成功。だいぶ暴れたような気もするけど、まあ問題ないわね」

//管理者・右側遠く

管理者「ずいぶんと暴れてくれたわね。復旧が大変そうだわ」

//奇襲者・正面近くから左側近くへ移動しながら

奇襲者「やっと偉そうなのが出てきたわね。あなたを倒せば、ノエルの居場所もわかりそう……」

//管理者・右側遠くから右側近くへ移動しながら」

管理者「ノエル……あの亡命を希望した子ね」

奇襲者「名前を知ってるってことは、やっぱり当たりだったみたい。仲間を返してもらうわよ！」

管理者「よく強気なことが言えるわね。こっちには結界があるというのに」

奇襲者「んっ……！」

奇襲者（来たわね、レオタード結界。でも、そのデータは解析済みよ！）

管理者「正気でいられるのも、いまのうちだけよ」

奇襲者「あなたの期待通りにはならないわ……お腹ががら空きのお偉いさん！」

＝管理者・正面近く

管理者「んぐっ……！　でも、時間が経てば……！」

＝奇襲者・左側近くから正面近くへ移動しながら

奇襲者「そうはならないって言ったはずよね？　薔薇の毒のデータは、解析済みなのよ？」

管理者「そう……でも、本当に解析できているのかしら？」

奇襲者「それは、あなたの目でも確かめられるでしょ？」

管理者「そうね。そろそろ毒が回っても……」

奇襲者「回っても……？」

管理者（まさか、結界を無力ができているというの？　いえ、でもそんなはずは……！
確かに、偽データを送信したはずよ……！）

管理者「放しなさい！」

奇襲者「やっと気づいたのね。薔薇の毒を無効化するナノマシンを寄生させてるって」

管理者「くっ……」

管理者（このままじゃやられるわ……いまのうちに応援を……）

奇襲者「おっと、応援を呼ぶのはなしよ？　快楽責めが好きなローズフレグランスのお偉いさん」

管理者「うぐっ……！」

奇襲者「いいことを思いついちゃった。あなたには、ここで快楽責めを受けてもらうわ」

管理者「なっ……！」

奇襲者「いままで散々、やってきたでしょ？　たまには、受けに回ってもいいんじゃない？　ふふふっ」

管理者「くっ……やめなさい……っ！」

＝奇襲者・正面近くから右耳元へ移動しながら

奇襲者「はいはい、おとなしくする」

＝奇襲者・右耳元

奇襲者「その身をもって、自分がしてきたことを味わいなさい（囁き）」

管理者「できるものなら、やってみなさいよ……！」

奇襲者「強気ねぇ……でも、あなたもレオタードを着てるってことは、勃起しちゃったら大変なのよねぇ？」

管理者「しなければいいだけよ……だいたい、私たちに毒は効かないのよ？」

奇襲者「だけど、しっかり刺激はされるわよね？　ほら、おちんちんツンツン、ツンツン」

管理者「うっ……うくっ……」

奇襲者「うふふ、しっかり反応してるじゃない。敏感なの？」

管理者「答えるわけないでしょ……」

奇襲者「じゃあ、もっとこするだけね……裏筋を指先で……ツツ～」

管理者「あっ、んっ……」

奇襲者「今度は亀頭を……グリグリグリ～♪」

管理者「んはっ……いやっ、やめて……！」

奇襲者「ほらほら、カリ首もぉ……シコシコシコ♪　あっ、触手が動き始めた♪」

管理者「んあぁぁっ……ニュルニュル、やめてぇ……！」

奇襲者「やってるのは私じゃないわよぉ？　あなたたちの切り札である、このレオタードが勝手にやってるの」

管理者「んんんんっ！　止まって……いやぁ、おちんぽダメぇ……尿道に入ってこない

でぇ……！」

奇襲者「しっかり入っちゃったわよぉ♪」

〃研究者・左側遠く

研究者「おや、騒がしいと思って来てみれば、楽しいことになってるねぇ」

管理者「い、いいところに……助けなさい……！」

奇襲者「はぁ……二体一だと、こっちが不利ね……」

管理者「ふふふっ、計算が甘かったわね」

〃研究者・左側遠くから左側近くに移動しながら

研究者「甘いのはキミじゃないかなぁ？」

〃研究者・左側近く

研究者「僕がキミを助けるっていつ言ったんだい？」

管理者「なんですって……！」

奇襲者「なに？　仲間割れ？」

研究者「キミのことを快楽責めにできる機会なんて、ここを逃したらないじゃないか」

管理者「あなた、なにを言っているの？　仲間が敵に襲われているのよ？」

研究者「それよりも、僕はキミを徹底的に責めてみたい。僕にとっては、国の平和より己の探求心のほうが大切なんだ」

研究者「そっちのキミ。今だけは僕たちが仲間だ。一緒に彼女を快楽責めにしようじゃないか」

奇襲者「いいわ、その案に乗ってあげる。せっかく勃起もさせたことだし」

管理者「狂ってるわ……ありえないわ……あってはならないわ……」

＝研究者・左耳元

研究者「まぁまぁ、そう言わずに……ちょうど試したい器具もあるんだよ。触手みたいに乳首を責めてくれるものなんだ」

研究者「毒自体はキミに効かないけど、薔薇の毒を塗って……」

管理者「やめなさい……そんなウィンウィン動いてるものを乳首にくっつけないで……！」

研究者「もう遅いよ」

管理者「んあぁあぁあぁあぁあっ！」

＝奇襲者・右耳元からフェラの位置に移動しながら

奇襲者「そっちは頼むわね」

＝奇襲者・フェラの位置

奇襲者「私はこっち……この勃起したおちんちんをフェラしてあげる……あぁむっ」

奇襲者「じゅる、じゅぷっ、ぷじゅぐっ、じゅぷじゅぷ……れろ、んれる……じゅぽぽぽっ、じゅぽぽ……」

管理者「あっ、んんっ……カリ、やめてぇ……っ」

奇襲者「んふふっ、カリが好きなのね……じゅぷぷぷぷっ、じゅぷっ、じゅぷぷぷぷっ」

〃フェラ４秒

研究者「こっちにもいることを忘れないでよねぇ……勃起した乳首を責めてあげてるんだから」

管理者「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……！」

管理者（耳もおちんぽも責められたら……ダメになっちゃう……っ！　触手もニュルニュルしてるし……っ）

奇襲者「れるっ、んれるっ、じゅぷじゅぷじゅぷっ、れるっ、れるるるっ、カリ以外にも弱いところを探してあげるわ……」

研究者「舌を裏筋に密着させたまま動いてあげるといいよ」

管理者「な、なんであなたが弱いところを……！」

奇襲者「なるほど、舌でまんべんなく裏筋をねぇ……れろっ、んれろっ、じゅぷっ、じゅぷっ、じゅぷぷぷっ……」

〃フェラ４秒

奇襲者「……じゅるっ、じゅるるっ……んぷぁっ……おちんちんも身体もビクビクさせちゃって……あむっ、んじゅっ、じゅずじゅずじゅず……

＝フェラ４秒

管理者「はぁはぁはぁはぁ……ダメぇ……そればっかりじゃぁ……」

研究者「乳首もしっかり責めろってことだね？　じゃあ、先端が動く速度を上げることにしよう」

管理者「誰が、そんなこと……！　んんんんんっ！」

奇襲者「反論よりも、我慢が必要じゃないかしら……おちんちん、もう限界まで膨らんでるわよ？」

奇襲者「ほら、さっきみたくカリを刺激してあげる……あむっ、んじゅっ、じゅるるっ、れるっ、じゅるっ、じゅるるっ、れるっ、じゅるっ、じゅるる……」

＝フェラ７秒

奇襲者「……じゅるっ、んれるっ……よく耐えるわね……」

管理者「これ以上、フェラしないでぇ……！」

研究者「どうしてフェラしちゃいけないのかなぁ？　こんなに気持ちよさそうなのに（囁き）」

管理者「で、出ちゃうからに決まってるでしょ……」

研究者「だったら、出しちゃえばいいんだよ……ほら、出ちゃうぅ～って叫びながら射精しなよ（囁き）」

管理者「そんな、恥ずかしい、こと、は……んぁあぁっ！」

研究者「ほら、ほら、出ちゃうよ～、出ちゃうよ～、びゅるびゅる射精しちゃうよ～」

管理者「いやぁ……出したくない……出したくない……！」

奇襲者「じゅぷじゅぷじゅぷじゅぷじゅぷじゅぷっ！　じゅるるるるっ！　ぴじゅぐっ！　じゅぷるるるっ……」

＝フェラ7秒

奇襲者「……んじゅるっ！　じゅる！　素直になりなさいょ……じゅるっ、むじゅっっ」

管理者（もう無理……こんなの、気持ちよくて我慢できるわけない……！）

管理者「出ちゃうぅ……精液、出ちゃう……射精しちゃう……ダメ、ダメ、ダメ、ダメ……っ！　出るぅぅ、出るぅぅぅぅぅ……っ！」

管理者「出ちゃうぅぅぅぅぅぅぅぅっ！」

〝射精

管理者「あぁぁああっ……んあぁぁぁぁ……あぁぁぁあっ！」

奇襲者「んんっ……口の中でおちんちんが脈打ってる……っ！」

研究者「触手くんも大喜びで吸い取ってるねぇ」

管理者「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……あぁぁ、あぁぁああっ……っっくぅ……ふぅ、ふぅ、ふぅ……」

管理者「これで、終わりでしょう……？　早く助けなさい……この侵入者を捕まえて……はぁ、はぁ、はぁ……」

研究者「それはできない相談だね。まだ僕が射精させていないもん」

管理者「ちょっと！　ふざけたこと言わないで！」

＝研究者・左耳元からフェラの位置に移動しながら

研究者「侵入者くん、僕と交代しようか。おちんぽは僕に任せて、これで乳首でも責めてあげてくれ」

＝奇襲者・フェラの位置から右耳元に移動しながら

奇襲者「ふふふっ、あなたおもしろいわね。違った形で出会いたかったわ」

管理者「好き勝手にするつもりでしょうけど、わたしだって二回も射精させられるような愚か者ではないわよ……」

＝奇襲者・右耳元

奇襲者「それは、結果を見ればわかることよ。ほら、乳首覚悟しなさい（囁き）」

管理者「んんんっ！　また、ウィンウィン動いて……！」

研究者「こっちはフェラにパイズリまで足してあげよう。二度目となれば、刺激は強いほうがいいだろうし」

研究者「おっぱいでホールドして……あむっ、んちゅっ、じゅるるっ、じゅるっ、んれ

るっ、れるっ……」

奇襲者「すっごい反応いいわね。射精した直後だから、おちんちんが敏感なんでしょ？このぶんだと、二回目の射精は早そう」

管理者「そ、そんな簡単には……あっ、んっ、ふあっ、あああああっ！」

奇襲者「あむっ、んちゅっ……こっちも、耳舐めを追加してあげるわ……じゅるっ、じゅるるるっ」

〃耳舐め６～７秒

奇襲者「……じゅるるっ、んれるっ、耳と乳首とおちんちん、三か所同時に責められてる気分はどうかしら？」

管理者「あふぅ、あふぅ、あふぅ……」

研究者「どうやら、答えられないみたいだね……あむっ、んじゅるっ、じゅるるっ……」

奇襲者「ほんと、嫌だって言ってる割に感じてるんだから……あむっ、んちゅっ……」

〃耳舐め６～７秒

奇襲者「……れろっ、れろろろろっ……んふふっ、舐めれば舐めるほど感じてくれる♪」

研究者「こっちも負けていられないねぇ……あむっ、んちゅっ……カリもたっぷり刺激しながら……ぴじゅぐっ、じゅるるっ、じゅるるっ、んれるっ……」

研究者「おっぱいで裏筋までこすれるようにしてぇ……じゅぷじゅぷ、じゅぷぷぷぷぷっ、じゅるるっ！」

管理者「んんっ！　壊れちゃう……こんなに責められたら、壊れちゃうのぉ……！」

奇襲者「んれるっ、れるるるっ、れろろろろっ、壊れたっていいじゃない……んれる、れろろろろっ……」

＝耳舐め６～７秒

奇襲者「……んれるっ、れるっ……ほら、壊れちゃいなさいよ……普段は壊してるんでしょ？」

管理者「壊すほどやってない……っ！」

奇襲者「嘘おっしゃい……れるっ、んれる、じゅるるるっ、どうせやってるでしょ……れるるるっ」

管理者「やってるのは、そっちの研究者で……わたしは、そこまでは……っ！」

研究者「はぷっ、んじゅるっ、れるっ、んちゅっ、れるっ、ちゅっ……心外だねぇ、僕だけのせいにするなんて……」

研究者「れるっ、んじゅるるるっ、じゅぷじゅぷ……でも、いい感じに腹が立ったから、おっぱいの締めつけを強くしてあげよう……ほら、むぎゅうっ！」

管理者「んぐっっ……！」

奇襲者「こっちは……このスイッチでいいのかしら……」

管理者「んひゃあぁぁあっ、そんなにしたら、乳首が取れちゃう……！」

奇襲者「当たりだったみたいね♪　でも、この様子だと長くはもたなそう……はぷっ、んじゅるっ……」

＝耳舐め６～７秒

奇襲者「……じゅるっ、んれるっ……やっぱり、背中まで反らしてイっちゃいそう……」

奇襲者「ほら、イっちゃいなさいよ。本当は、びゅるるる～って射精したいんでしょ？」

管理者「そんな、ことは……！」

奇襲者「素直に言いなさいよ。そしたら、思いっきりイカせてあげるわよ？」

管理者「言わない……絶対に、言わない……！」

奇襲者「そう、だったら……あむっ、んちゅっ、んじゅるっ……」

＝耳舐め６～７秒

奇襲者「……んれるっ、れるるるっ……ふふふっ、もう射精してないのがおかしいくらい震えてるわね」

奇襲者「この状態でも素直になれないなら、ダメ押しするしかないわね……んれるっ、じゅるるっ！　じゅるるるっ！　んじゅっ！　じゅるるるっ！」

管理者「いやぁ、それ、ダメ……耳、感じすぎちゃう……」

管理者「イっちゃう……また出ちゃう……出ちゃう、出ちゃう……！　もう舐めないでぇ……精液、出ちゃうからぁぁ……」

研究者「んふふっ……やっと叫びだした」

奇襲者「ほら、出しなさい……精液、びゅるる～って」

管理者「いやぁ、いやぁ……二回も射精なんて……！　でも、でもぉ……！」

奇襲者「出したら楽になれるわよ（囁き）」

管理者「今そんなこと、言わないでぇ……」

研究者「おちんぽまでプルプル震え出した。イっちゃうんだね……じゅるるるるっ、じゅぷぷぷぷぷっ、じゅるっ、じゅるっ、じゅるるるるっ！」

管理者「もうダメっ……イク、イクっ、イクっ……おちんぽ……おちんぽだめぇ……イっちゃう、イっちゃう……ダメ、ダメっ、イクイクっ、イクっ……」

管理者「イクぅぅぅぅぅぅぅぅっ！」

＝射精

管理者「あぁぁぁあっ、またイっちゃったぁ……はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」

研究者「ふふふふふっ。いいイキっぷりだったねぇ。一回目より出てるんじゃないかなぁ？」

管理者「そ、そんなことは……」

奇襲者「ないって言いきれるの？　さっきよりも触手の動きが激しいわよ？」

管理者「ないわよ……出したわたしが言うんだから、ないの……はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」

管理者「これで、今度こそ解放される……」

奇襲者「いや、また私の番よ。いいでしょ？」

研究者「僕は異論ないね。もう一回ぐらい、出させておきたい」

管理者「そんな……！」

＝奇襲者・右耳元からフェラの位置へ移動しながら

奇襲者「今度は、私がパイズリフェラをしてあげるわ」

研究者「僕はちょっと違うことを考えようかな。先に始めていてくれ」

奇襲者「じゃあ、三回目の射精に向けて始めるわよ……あの研究者のおっぱいとどっちが気持ちいいのか、比べてみるのもいいんじゃない？　あぁあむっ」

管理者「こんなことになるなんて……！」

奇襲者「はむっ、んじゅっ、じゅるるっ、じゅぷじゅぷじゅぷっ、じゅぷぷぷぷぷっ……」

＝パイズリフェラでフェードアウト

//5章

//管理者・正面近く

管理者「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……もうやめてぇ……出ちゃう、出ちゃうからぁ……！」

//奇襲者・フェラの位置

奇襲者「だひていいのよ……じゅぷじゅぷじゅぷっ！　じゅるるっ、じゅるるるるっ！」

管理者「出る、出る、出る……っ！」

//射精

奇襲者「んんんんっ……！　んぷあぁっ……はぁ、はぁ……すごいすごい、三回目の射精、おめでとう♪」

管理者「なにが、おめでとうなのよ……はぁ、はぁ、はぁ……」

//研究者・左耳近く

研究者「いやいや、いいイキっぷりだったよ。おめでとうで間違っていないねぇ」

奇襲者「でしょぉ……？」

管理者「どうして、わかり合って……」

研究者「おや、もう喋ることもつらいか……まあ、あれだけ無理に搾れば仕方ないね」

奇襲者「ふふふっ、ある意味羨ましいわね。絶対に嫌だけど」

研究者「僕も同感だ」

奇襲者「だけど、同意できるのはここまでね、狂ってる研究者さん」

研修者「……ん？　なんだい、次は僕を狙おうって言うのかい？　侵入者くん」

奇襲者「そうよ。もうこっちは沈めたんだから、次はあなたでしょ？」

研究者「これを機に友情を育むのもいいと思ったんだけど？」

奇襲者「お互いに利用しただけでしょ？　友情なんて育めるはずないわ」

管理者「勝手に話しを進めないでくれる？　ふたりとも……」

奇襲者「へぇ……まだ立てるのね。でも、そんな状態で私をどうにかできるかしら？」

奇襲者「知っているでしょ？　私にはあなたたちの切り札が効かないって」

管理者「効かなくたって、ここはわたしたちのホームよ。ありとあらゆるものが用意してあるの……」

奇襲者「その点に関しては、こっちも対策を練ってきてるんだけどねぇ」

研究者「悪いけど、キミには毒が効くようになってるよ？　侵入者くん」

奇襲者「……どういうこと？」

奇襲者（話が違うじゃない……なによこれは……）

研究者「彼女の体液には、キミが寄生させている、薔薇の毒を無効化するナノマシンを破壊する毒薬をしこんでいてね」

研究者「汗やだ液が口に触れた時点で効果を発揮するし、レオタード越しでもフェラをしたらアウトなんだ」

管理者「……わたしも聞かされていないわよ。そんなこと」

研究者「黙っておいたほうがおもしろいだろう？」

奇襲者（どうなってるの？　この研究者は、私たちに味方してくれるスパイじゃなかったの？）

奇襲者（そのために、事前の話通りにしてたんだけど……）

研究者「さて、侵入者くん。いろいろ（強調）と絶望しているところ悪いけど、薔薇の毒の餌食になってもらおうか。ふふふふっ」

//6章

//研究者・左耳近く

研究者「さてと、捕らわれの身になった気分はどうかな？　まあ、いいわけないと思うけど」

//奇襲者・正面近く

奇襲者「裏切り者……！」

研究者「なんの話かなぁ？」

奇襲者「トボけるな！」

//管理者・右耳近く

管理者「言い返すより、覚悟した方がいいと思うわよ？　あなたには、薔薇の毒の原液を注入する予定だから」

//研究者・左耳元

研究者「そのためにも、まずは勃起してもらわないとねぇ。ほら、触ってあげるから勃起

させてごらん」

研究者「裏筋を、指先でぇ……」

奇襲者「うくっ……」

研究者「ふふふっ、少しこすってあげただけで反応してるねぇ」

奇襲者「だからって、簡単に勃起はしないわよ……奇襲をかける以上、快楽責めへの対策ぐらいはしてるわ」

＝管理者・右耳元

管理者「その対策が意味をなさないくらい、感じさせてあげればいいだけね……あむっ、んちゅっ、れるっ、れるるるっ」

管理者「れるるるるっ、んれるっ、んじゅっ、れるるるっ……んれるっ、れるっ、れろろろろっ、れろ、れろろろろっ」

奇襲者「……あっ、んっ……そんな耳舐めぐらいじゃ、私のおちんぽは勃たないわ……」

研究者「あむっ、んちゅっ……両方からの耳舐めなら、そこそこ効くんじゃないかなぁ……んれるっ、れろっ、れろろろろ」

管理者「んちゅっ、ちゅっ、はぁむっ、れるっ、れるるるっ」

研究者「れるぅぅ、んれるっ、れろろろろっ、じゅるっ、じゅるるるっ」

管理者「はぁぁ……あむっ、んちゅっ、んじゅるっ、れるじゅっ、れるるるるっ」

奇襲者「くっ……うっ……」

研究者「かなり効いてきてるね……おちんぽも、より感じやすいように亀頭をいじくってあげよう」

奇襲者「あくっ……んんんっ……！」

研究者「いい声を出してくれたねぇ。そろそろ耐え切れなくなる頃かな……はぁむっ、れるっ、れるるるるっ」

管理者「勃起しなさい……れるっ、んじゅぅ、れるるる、れるぅぅっ」

研究者「勃起していいんだよ……んれるぅ、んれるぅ、んじゅう、じゅるるっ」

管理者「おちんちん、感じてるんでしょ……んれるっ、れるっ」

研究者「……れるっ、んじゅるっ……勃起しちゃった方が楽だよ？

奇襲者「勃起なんて……」

研究者「そっか……じゃあ、おちんぽ握ってしごいちゃおうね」

奇襲者「あっ、んんっ、ぁ、あぁぅっ、んあっ、あぁぁあぁ……っ！！」

管理者「ふふふ。ムクムクしてきたわ。触手も動き出したみたい」

奇襲者「あぁぁあぁっ！？　にょ、尿道、の、中、にぃ……っっ！」

研究者「どうだい？　尿道に入られただけで気持ちいいでよぉ？」

奇襲者「くっ……ふぅうんっ……中で、ヌルヌル動いて……あぁあぁっ！」

研究者「触手くんのこと、気に入ってくれたみたいだねぇ」

管理者「じゃあ、準備も整ったことだし……」

研究者「原液を注入しようか。まずは少量だけ入れるよ？」

奇襲者「うぐっ……！　はぁっ、あぁあぁっ！　尿道が、熱い……っ！」

研究者「これも、お気に召してくれたみたいだねぇ」

奇襲者「くっ……あっ……ひとでなし……ふぅ、ふぅぅぅ……」

〃管理者・右耳元から正面近くへ移動しながら

管理者「あなたも、似たようなことをわたしにしたでしょ？」

〃管理者・正面近く

管理者「いまから、そのお返しもしてあげるから。あなたの精液、お口で搾り取ってあげるわ……あぁぁぁあむっ、んちゅっ、んれるっ、じゅるるｘち」」

管理者「んじゅっ、じゅるるっ、んれるっ……れるっ、んじゅっ、じゅりゅりゅ……ぴじゅぐっ、じゅぷぷぷぷっ、じゅぽぽぽぽぽぽっ」

奇襲者「あぁっ、んんっ……激し、過ぎるぅ……っ！」

研究者「最初から飛ばしてるねぇ……果たして、いつまで我慢できるかな？　あぁあむっ、んちゅっ、れるっ、んれるっ、れるるるっ」

研究者「れるっ、んれるっ、れろろろろっ……じゅ、んじゅ、ちゅっ、ちゅりゅぅ……あ

むあむっ、んれるっ、んじゅっ……」

奇襲者「くっ……はぁっ……んんっ……あぁああっ……！」

管理者「たくひゃん喘いでいいのよぉ……んじゅっ、じゅるるっ、じゅぽじゅぽっ、じゅぽぽぽぽっ、はむっ、れるっ、んれるっ、れるっ」

管理者「むしろぉ……あむっ、んじゅっ、じゅるっ、じゅるるるるっ……いっぱい、あなたが感じてるところを見せて欲しいわぁ……れぇるっ」

奇襲者（やられて、ばかりじゃ……でも、快感で力が入らない……っ）

研究者「んちゅっ、ちゅっ……れぇるっ、れるるるるっ……体がだいぶ力んでいるねぇ……我慢しようとしているのはわかるけど……」

研究者「れるっ、れるるっ、んれるっ、んちゅっ……毒の原液はまだまだ注入できるってことを忘れない方がいいよ……んじゅっ、れるっ」

研究者「逃げようとしたり……はむっ、んちゅっ……無駄に我慢しようとしたりすれば……即効でどっぷり注いじゃうからねぇ……はぷっ、んちゅっ」

奇襲者「この狂人……っ！」

研究者「なんとでも言ってくれたまえ……はぷっ、んれるっ……」

管理者「そうやって強がるなら……んじゅるっ、じゅるるっ……ここでもう一回……はむっ、んちゅっ……注入しちゃうわよ……」

研究者「れぇるっ、れるるるっ……それもいいね……あむっ、んちゅっ……注入しちゃおう……」

管理者「そうね……れる、んれるっ……んぷあぁぅ……んふふ、じゃあいくわよ……

奇襲者「や、やめなさい……っ！」

管理者「それでやめるような人は、どこにもいなわよ……ほぉら♪」

奇襲者「あぁああぁぁあぁあっ……っっ！　また、おちんちんの中がぁ……どぷどぷ入れられてぇ……っっ！」

研究者「さっきの倍は行こうか」

奇襲者「んあああぁぁあああっ……！　や、やめ……んんんっ！！」

管理者「そろそろ、ストップでいいかしらね」

奇襲者「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……んんんんっ！！」

管理者「あらら、触ってもないのにビクビク震えるようになっちゃった。これはこれで、やぶり甲斐があるけど」

奇襲者「くぅぅっ……やめ、な、さい……」

奇襲者（おちんちんが熱くて……頭もクラクラしてきた……はぁ、はぁ）

管理者「じゃあ、続きのフェラいくわね……あぁあむっ、んちゅっ、んれるっ、じゅぷぷぷぷぷっ、じゅぷっ、ぴじゅぐるっ」

研究者「こっちも、耳舐めを……あぁむっ、れるっ、んじゅっ、れるるるるっ、んれるっ、れるっ、れるるるるっ」

奇襲者「くあぁ、あぁぁっ……ダメぇ……感じ、すぎちゃう……っっ！」

管理者「じゅぷじゅぷじゅぷっ……れる、れるるるっ……それでいいのよ、毒の原液を入れてるんだから……あむっ、んちゅっ」

管理者「はむっ、んじゅるっ、じゅるっ、じゅるるっ、んじゅっ、じゅぽじゅぽじゅぽじゅぽっ……じゅるっ、じゅりゅりゅりゅりゅっ」

奇襲者「はぁ、はぁ、はぁ……おちんちんが、溶けちゃいそう……変なもの入れられて、体がおかしくなってるのに……舐められ、すぎてぇ……」

研究者「もう少し頑張ってくれ、隙を見てノエルを連れてくるから（囁き）」

研究者「反応してはいけないよ。彼女に気づかれたらおしまいになる（囁き）」

奇襲者（こ、この研究者、裏切ったんじゃなかったの……？）

研究者「僕もキミに負けないように、もうちょっと激しくしようかなぁ……んれるっ！　れるっ！　れるるるるっ！　れるっ！　んれるっ、れるるるるっ！」

奇襲者「くっ、ふあぁ、あぁあっ……！　耳ぃ……そんなにぃ……！　奥まで、舌が、入りこんでぇ……っ！」

研究者「れるっ、んれるっ、れるるるるるっ、んじゅっ、れるっ、れるぅぅっ、れろろろろろっ！」

管理者「……んじゅっ、じゅるるっ、じゅぷぷぷっ、じゅるるるるるるっ……すごい勢い……わたしよりも激しいじゃない……」

管理者「はぷぅ、んじゅ、じゅるる、じゅぽじゅぽっ、んじゅ、じゅぽじゅぽじゅぽじゅぽっ……！」

奇襲者「くっ、ああっ……はぁあっ、あぁあああああっ……！　おちんちん、取れちゃう……そこまで、吸わなくても……！」」

管理者「そろそろイキそうかしらね……あむっ、んじゅっ……！　イっていいわよぉ……もう、タマタマもきゅってあがってるし……」

研究者「いっぱい出しておくれ……れるっ、んじゅっ、れるっ、れるるるるっ……その方が、触手くんも喜ぶだろうから……」

奇襲者「なんで喜ばせなくちゃいけないのよ……はぁ、はぁ……」

管理者「……じゅっ、んちゅっ……んぷあぁっ……我慢しちゃうなら、また注入ね」

奇襲者「そ、それだけは……また尿道に注がれたら……！」

管理者「はい注入♪」

奇襲者「あぁああぁぁあっ！　イクっ、イクイクっ、イっちゃう、らめぇ……おちんちん、おかしくなって……！」

奇襲者「イクっ、イクっ……イクぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ！！」

研究者「んふふっ♪　いいイキっぷりだねぇ……触手くんもニュルニュル動いて悦んでるよ」

奇襲者「んあああぁぁああっ……！　敏感になってるのに、動かないで……っ！」

管理者「そう言っても無駄よ。わたしたちにもコントロールはできないんだから」

奇襲者「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……っっくぅ……あぁ、あぁあ、あああぁぁ……っ！」

管理者「ふふふふっ、さっきまでわたしを責めていた人とは思えないわね」

研究者「もっと、そう思えないようにしてしまった方が楽しいかもしれないよ」

奇襲者「はぁ、はぁ……まさか、また……！」

研究者「そのまさかだね♪　原液を注入してあげてよ」

管理者「じゃあ、さらに多めに……♪」

奇襲者「やめてぇ……あぁぁあぁぁぁあぁっ！！」

研究者「ほらほら、もっともっと！」

奇襲者「あああぁぁあっ、あっ、んあっ、あっっ、あああぁぁあぁぁあぁぁあっ！！　頭の中までおかしくなっちゃう……！」

研究者「そもそも、それを目的に作られたものだよ。だから、存分におかしくなっておくれ」

奇襲者「くっ、はぁ、あぁぁっ、んあぁぁあぁっ……！」

奇襲者（ノエルを呼びに行ってくれるんじゃ、なかったの……？）

管理者「じゃあ、このままパイズリでも始めちゃいましょうか……おっぱいで、ビクビクのおちんちんを挟んで……」

奇襲者「うくっっっっ……！」

管理者「はぁーい、ヌプヌプ開始よー」

奇襲者「あっ、んあっ、はぁあっ、あぁあぁっ！　せめて、もう少し休んでから……そうじゃ、ないと……」

管理者「精液なら、たっぷり出るから大丈夫よ？　この薔薇の毒は媚薬だもの」

奇襲者「そういう、意味じゃ、なく、て……はぁ、んんぅ、あぁあっ、んあぁあぁっ！」

管理者「もっと感じなさい……おちんちん、この柔肉でいくらでもしごいてあげるから……♪　ほらほら、亀頭が谷間から出たり入ったり……♪」

奇襲者「くっ、あぁあっ……！」

管理者「いいわ、もっと感じなさい。いっぱい精液作って、盛大に射精できるように……っ！」

管理者「そのために、わたしもすこーし頑張ってあげるから……あぁむっ、んじゅっ、じゅるっ、じゅるっ、じゅるるるっ！」

奇襲者「あんあぁっ、ふあぁあっ……フェラまで、しないでいいでしょ……これだけ感じてるん、だから……はぁ、はぁ……」

管理者「もっと感じてほしいのよ……あむっ、んじゅっ、じゅるる、じゅるっ、じゅるっ、んじゅるっ……！」

管理者「あなたが感じれば感じるほど、わたしは嬉しいの……すごく献身的でしょ？　はぷっ、んちゅっ、ちゅっ、ちゅりゅぅぅっ……！」

奇襲者（徹底的にやるつもりね……さっきの、お返しに……！）

奇襲者（でも、ノエルが来てくれれば形成逆転……あの研究者もまたこっちについてくれるでしょうし……）

管理者「……んじゅっ、じゅっ、じゅるるるっ、じゅぅぅ……んぷぁぁっ、まだ理性を保ててるみたいだし、また毒の原液を注入しましょうか」

奇襲者「うくっ……んんんっ……必要もないのに、また入れるのね……でも、何度も注入されてるんだから、私だって慣れてきてるわよ……」

管理者「それが本当かどうかは、注入すればわかるわ」

奇襲者「くあぁぁぁあぁっ！！！！　あああぁぁあぁぁぁっっ！！！！　奥まで、入って……あぁあぁぁあぁっ！」

管理者「膀胱が毒の原液でいっぱいになるくらい、注ぎこんであげるわ」

奇襲者「ああぁぁぁ……はぁぁぁぁぁ……あぁぁぁぁぁ……んあぁぁぁあぁぁぁあぁ……」

管理者「あらら、だるーんってなっちゃったわね。完全に、毒が体に回ってるわ」

奇襲者「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……も、もう、むりぃ……これ以上、注がないでぇ……」

管理者「それは、あなたの体がどこまで深く毒に冒されてるかによるわ……あむっ、んちゅっ、ちゅっ、じゅりゅりゅりゅっ、じゅるっ、じゅるるっ……！」

奇襲者「くあぁあぅ、はぁぁぁあっ……んんっ、これでもまたパイズリとフェラをするのね……あぁあぁ、んあぁぁあぁっ……！」

研究者「ノエルを連れてきたよ（囁き）」

管理者「……あむっ、んじゅっ、れるっ……どこに行ってたのよ……あむっ、んちゅっ……この侵入者を快楽責めにしなくちゃいけないのに……はむっ、んちゅっ」

研究者「もうちょっと、遊びを入れようと思ってね」

研究者「すまないが、事情が変わった。ノエルのことは連れて来たんだけど……（囁き）」

＝ノエル・右耳元

ノエル「はぁはぁはぁはぁ……この耳、舐めていいの、よね……はぁはぁはぁ……あむっ！　じゅるるるっ！　じゅるっ！　じゅるるるっ！　れろろろろっ……！」

奇襲者「くっ、あっ、んあぁあぁあっ！」

奇襲者（ノエル……？　なに、この状態は……）

管理者「毒にあてられて暴走状態になっちゃったのね……あむっ、んじゅっ、じゅるるっ、れるっ、んじゅっ……！」

管理者「あなたも、毒の原液を注入されている以上、同じようになるわよ……あむっ、んちゅっ、じゅる、じゅるるるるっ！」

奇襲者「あぁぁんっ、あぁあっ、んあっ、あああぁぁあぁっ……！」

研究者「こういうわけだから、僕もキミを責めさせてもらう……あむっ、んじゅっ、れるっ、れるれるれるっ、れろろろろっ！」

ノエル「れるじゅっ、じゅれるっ、れるっ、れろろろろっ……！　耳ぃ……もっとぉ、ぺロぺロぉ……はぁむっ、んじゅっ、れるるるっ！」

ノエル「れるっ、れるっ、んれるれるっ……はむっ、んんぅ……んふぅ、んふぅ、んふぅ（鼻息）……はむっ、んじゅっ……！」

奇襲者「三人同時なんて……あぁぁ、んあぁぁ、あぁ、んあぁぁあ……はぁ、あぁぁあぁ……っ！」

管理者「んじゅっ、れるじゅっ、ぴじゅぐりゅっ……じゅぽぽぽっ、じゅぽじゅぽっ、じゅぷぷぷぷっ……！」

管理者「さすがにつらいかしら……れるっ、んじゅっ……！」

奇襲者（両耳も亀頭も舐められて、竿はおっぱいでしごかれて……こんな気持ちいいの、耐えられるわけない……っ！）

奇襲者「あああぁぁぁぁぁっ……！　らめぇ……もう、出るぅ……！」

研究者「戻ってきたと思ったら、もう出ちゃうのか……れるっ、んじゅっ、じゅるるるっ、れるっ」

管理者「じゃあ、最後にまた毒の注入といきましょうか。最後だから特盛サービスにしておくわね」

奇襲者「しょ、しょんなの、らめぇ……いまさら特盛とか……むりぃ……ひぃひぃひぃひぃ……っ！」

管理者「無理と言われても、注入しちゃうわ。ほら、たっぷりおちんちんで飲み込みなさい」

奇襲者「あふぁぁぁぁあぁぁぁあぁっ！！　んあぅ、あああぁぁあぁっ！　おちんちん、壊

れるぅぅぅ……っ！！」

研究者「どうせなら、壊れてみてもおもしろいと思うけどねえ」

奇襲者「いやぁ……おちんぽ、壊れたくない……っ！！」

ノエル「んじゅる、れるれるれるれるっ……おちんぽ、壊れても、らいじょうぶぅ……れるるっ、れるるっ、れるっ、れるっ……！」

奇襲者「大丈夫だなんて、ありえ、ない……あぁ、あぁぁ、んあぁぁぁ、あぁぁあぁぁあっ！」

管理者「それじゃあ、あとは射精だけ……いっぱい出してちょうだいね、憐れな侵入者さん……じゅるっ、じゅるるっ、んれるっ、じゅるるるっ……！」

奇襲者「あ、んあっ、あぁ、ぁっ、んあぁあっ！　イっちゃう……おちんぽ、イっちゃう……らめぇ、らめぇ……！」

＝ノエル・正面間近

ノエル「イクなら、キス……あむっ、んちゅっ、ちゅっ、んちゅぅぅ……んれるっ、れろっ……ちゅっ、んちゅっ、ちゅっ、ちゅぅ、ちゅぅぅ、んちゅっ……」

奇襲者「の、ノエ、る……んぷっ、んちゅっ、んんっ！　んんんっ……！」

研究者「熱いキスとは、妬けてしまうね……あむっ、んじゅっ、れるっ、んじゅっ……」

ノエル「んちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、んちゅっ、はぷっ、んちゅっ……れるっ、れろろろろっ……私のだ液ぃ、飲んでぇ……れるっ、んちゅ……」

奇襲者「あなた、ここまで……んんんっ！？　な、なに……口の中が、おちんぽと同じみたいにぃ……！」

＝管理者・正面近く

管理者「じゅるるっ、じゅるっ……暴走すると、キスで薔薇の毒を口移しできるのよ……あむぅ、じゅるっ、じゅるるっ、れるっ……」

奇襲者「そんな……はぷぅ、んちゅっ……れるっ、れろろろろっ……ノエル、止まって……んれるっ、ちゅっ、ちゅぅ、んちゅ、ちゅっ……」

ノエル「キスぅ……いっぱいするのぉ……んちゅっ、ちゅ、むちゅっ、ちゅっ、あむっ、はぷっ、んちゅっ、ちゅ、ちゅぅぅ、ちゅっ……」

奇襲者（ただでさえ、おちんぽイキそうだったのに、毒を口移しまでされたら……！）

奇襲者「イクっ……んちゅっ、イクイクっ……はむっ、んちゅっ、んれるっ……おちんぽ、おちんぽぉ……れるっ、んちゅっ……精液、出ちゃうぅぅ……んちゅっ、れるっ！」

管理者「……あむっ、んじゅるっ、れるるるるるっ……気持ちいいんだから、ダメじゃなくて、気持ちよすぎる……って言いなさいよ……あむっ、れるるるっ……」

奇襲者「イクっ……んちゅっ、れるっ……おちんぽ、イっちゃう……れるっ、ちゅっ、むちゅっ、じゅるるるっ……気持ち、よすぎて……イクっ、イクイクっ、イクイクイクイクイクイクっ……！」

奇襲者「イクうぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっっ……っ！」

＝射精

奇襲者「んんんんんっっっっ……！！！！　おちんぽ、射精、ひて……んちゅっ、れるっ、ノエ、ル……もう、イった、から……んちゅっ、れるっ、れるっ」

ノエル「キス……もっと……んちゅっ、れるっ、れるるるるっ、んれるっ……ちゅっ、んちゅっ、ちゅっ、ちゅ、んちゅぅぅ……じゅるるるっ」

管理者「大変そうね。射精してるのに情熱的なキスをされて」

研究者「……れるっ、れるるるるっ、んれるっ……僕も追加サービスをしてあげよう……

れるっ、んれるっ」

ノエル「れるるるっ、れるるるるるっ、んれるっ、れるっ、んじゅっ、ちゅっ、れるるるるっ……いっぱい、射精、して……れるるるるっ」

奇襲者「もう、いっぱい、出てるぅ……んちゅっ、ちゅっ……触手に吸い取られてぇ……ちゅぅ、んちゅっ、んれるっ、れるっ……」

管理者「この子は、こんなにキス魔だったのかしら。暴走状態といっても、キスしすぎよね」

研究者「その辺りは、さすがにわからないね。僕にいまわかるのは、ふたりが気持ちよさそうってことだけだよ」

ノエル「んちゅっ、ちゅちゅ、キスぅ……キスぅ……いっぱい、キスぅぅ……んちゅっ、れるっ、んっ、れるるるっ、んちゅっ、ちゅ、ちゅぅぅぅ……」